

スペイン カキのブランドが25周年

FreshPlaza 2023年9月28日

カキ・ペルシモン(Kaki Persimon®)は、このブランドの25周年となる2023年の出荷シーズンを開始する。これは、バレンシア州リベラ・デル・シュケル(Ribera del Xúquer)地域の原産地呼称保護(PDO)*ラベルを付して販売されるロホ・ブリランテ(Rojo Brillante)品種のカキである。近年の傾向に従い栽培面積は今年もわずかに減少するが、昨シーズンよりも安定した出荷が見込まれる。(※:地理的表示保護制度(PGI)とは別の制度)

リベラ・シュケルのカキPDO規制委員会のシリロ・アルナンデス委員長は、「一部の地域では何がしかの出来事も起きているが、過去2シーズンのような浮き沈みのない収穫を期待している。通常のシーズンの出荷量である約11万トンの販売を見込んでいる」と述べた。(以下「」は同委員長の発言)

『通常の出荷シーズン』について語る場合、それは数年前に想定されていた出荷量よりも少ないことを覚えておく必要がある。当時は、(カキ全体で)現在よりはるかに多い50万~60万トンの最大潜在生産量をどうにか達成していた。近年、カキの栽培面積が減少しているため、今後数年間の生産量予測は少ない。」

同氏によると、規制委員会に登録されている面積は、生産量の少ない年があったことと、とりわけ収益性の欠如の結果として、近年わずかに減少している。「登録抹消された面積の大部分が個人生産者のものであることは重要である。これは、実質的に協同組合が耕作する面積が安定していることを意味し、協同組合の取組が収益性の確保に有効であることを示している。また、全国レベルでも生産性と収益性の低い園地の面積が大幅に減少しており、ひいては出荷量の減少につながっていることは興味深い。」

カキ・ペルシモンの出荷量は1997年の約4千トンから2019年には12万トン超に

同氏はカキ・ペルシモンの歴史を概説した。「規制委員会は、複数の協同組合と一部の小規模事業者の要請により1998年に設立された。彼らは、そのサイズと品質で際立っていたユニークな品種ロホ・ブリランテの可能性にすでに気付き始めていた。2001年には、欧州委員会から原産地呼称保護を与えられ、このような認定を受けた世界で唯一のカキとなった。」

「カキのブームは過去15年の間に起こったと言えるだろう。この時期、栽培面積は指数関数的に拡大し、カキの予想収穫量は60万トンに急増したが、その後の現実とは異なる。いずれにせよ、90年代後半にカキ・ペルシモンが導入された際には、このブランドに関する知識がまだ非常に浅いにもかかわらず、毎シーズン新しい消費者と市場を獲得した。」

その後、1997年に4千トン強であった原産地呼称制度の下での出荷量は、過去最高であった2019年には12万トンを超えた。「年次統計は、一部の例外を除いて、栽培面積の増加と並行して出荷量が毎年着実に増加したことを明確に示している。」

商品不足の年が季節商品に必要な商品と消費者の関係確立を困難に

「過去2年は、大幅な減収により出荷予測にかなりの打撃を与えたため、今年は通常に戻って消費者を取り戻すことが重要である。このような季節商品はこうした状況に敏感であり、まだ多くの消費者に知られていない商品についてはなおさらである。大幅に減収する年には、商品と消費者の関係を確立することが難しい。」

「しかし、理論的には、近年既に見られたように、高価格で量が少ないことは通常の出荷量で低価格なのと同様に良くないことであり、適正な価格も必要である。特にこのセクターが原材料価格に苦しんでいる現在の状況ではそうである。我々の目標は、会員の生産者の生き残りを後押しするため生産者にとっての収益性を確実に維持するとともに、すべてが保証された質の高い食品への消費者のアクセスを確保することである。」

25周年に当たり生産者には相応しい認識を持ってもらいたい

規制委員会は25周年を祝うに当たり、原産地呼称が象徴するすべてのことを強調したいとしている。「当委員会は、生産者がその活動に相応しい認識を持つための取組、またそれが関係する土地とその『食の自律性』への取組を強調したい。とりわけ、高品質の地元産品の供給を保証することを目指す。消費者が原産地呼称の背景を理解することは、生産者が自らの仕事の有用性を認識し、それを誇りに思うことと同様に重要である。したがって、この原産地呼称の中核を担う協同組合をはじめとするあらゆるレベルで、生産者の仕事を認識することを目的とした取り組みを行うこととしている。」